最優秀作品

世界がひとつになるために

豊里中学校１年　林（はやし）　奏和（そわ）

「地球が病んでいる」

最近、本当に全くいいニュースを見ることがなくなった。僕はお父さんのその言葉をなんとなく聞いていたがとても重いひとことだと思った。この令和の僕たちの生きている時代のことなのだ。決して無視してはいけない。今もあちこちで核実験や紛争が行われている。また違う国では、貧困で困っている人や難民が増えている。温暖化が進み、オゾン層の破壊や異常気象で地震が多く、豪雨で洪水被害も心配だ。なんと言っても一番はテレビの画面から目に飛び込んでくる戦争でのひどい映像に目を向けられないことがあったことだ。戦争の怖さが画面を通して日々伝わってくるなんて最近まで思いもしなかった。

以前、僕は両親に連れられ、戦争のことを知るために広島旅行に行ったことがあった。その広島は、日本がかつて戦争を起こし、世界で初めて原爆を落とされた場所だからその場に連れて行きたかったと聞いた。広島平和記念資料館には、戦時中の生活の写真やジオラマで細かに作られた当時の暮らしを再現した人々の様子や、子ども向けにも分かりやすい戦争に関するパネルなどたくさんの展示物や資料があった。僕と同じ年齢くらいの子どもが被ばくしたリアルな映像を見て本当にびっくりした。戦争の本を読んだことがあったけれど、その当時を細かに知った資料館や、焼けた原爆ドームを実際に見に行った記憶は今でも強く残っている。でも、その時は昔のことで今は戦争はなくなって幸せな世界になってきていると思っていた。過去の反省から戦争はなくなってきていると勝手に思いこんでいた。でも、そうではなかったんだと最近分かった。戦争がなく安心して暮らせているのは僕の知っている狭い狭い世界でしかなかった。僕は毎日安心して眠れるし、学校も行けて勉強もできる。食べることも不自由なく食べられて友達とも遊べる。でも、お父さんが言った言葉の通り世界が病んでいる現実を最近知った。少しはずかしいきもちにも思った。今もまだ戦争がなくなって平和な世界にはなっていない。今まで何不自由なく育ってきて、安心して暮らせることを当たり前だと思っていた。身近なことしか気にせず暮らしていた。日本は核兵器を戦争で使われた世界でただ一つの国だった。すっかり戦争を過去のこととして学んだと思っていた。しかし、身近な世界ではなく、しっかりといろいろな国々の状況に目を向けないといけないんだ。自分の身のまわりの生活に感謝しながら、他の国々も同じように安心して穏やかに暮らせる社会になるように考えなければならない。

でも、僕に何ができるだろう。多くの人に平和の大切さを分かってもらうことや広めるためにできることは何だろう。戦争が起こるのは、相手のことを考えず自分勝手な言い分や得をすることばかりを主張することが原因だと思うので、相手の立場になって考えるきもちを大切にすることが大切だと思う。相手と自分のきもちを同じように考えていきたい。

あと、僕は世界中の人たちとどんどん仲良くなってたくさん友達になりたい。僕は英語を習いに行っているので、勉強を頑張って、たくさん話ができるようになりたい。そして、世界中のたくさんの国々の人と友達になってみんなで仲良く平和な世界にしたい。僕は世界が一つになるためにできる限り努力して、今できることに全力で取り組んでいきたいと思う。

優秀作品

食品ロスに全ての人で立ち向かおう

西八田小学校６年　大西（おおにし）　悠月（ゆづき）

私が食品ロス問題に目をつけた理由は、前、国語科の学習で食品ロスについて調べた時、世界では一年間で十三億トンもの食材が捨てられていることを知ったからです。そしてもっと調べていくと、十三億トンのうち、日本では、約六百十二万トンもの食材が捨てられていました。これは一人あたり毎日お茶碗一杯分の食材を捨てていることになります。

「食品ロス」とは、まだ食べれるのに残して捨ててしまったり、買った食材を食べるのを忘れていたりして、食材を無駄にしてしまうことをいいます。

食品ロスがなぜよくないかというと、あまったり捨てた食品を全て燃やして、焼却処理するときに排出される、二酸化炭素が地球温暖化の原因となる温室効果を高めてしまいます。食品ロスが増えることで結果的に地球温暖化を進行させてしまうことになるのです。

食品ロスは、食品関連事業者だけでなく、一般の家庭からも多く発生しています。日本の約六百十二万トンのうち、事業系は約三百九万トンで、主に、規格外品や、返品、売れ残り、食べ残しが原因となっています。一方、家庭では、約二百六十一万トンで主に食べ残し、手つかずの食品、野菜や、果物の皮のむきすぎが原因となっています。また、まだ食べられるのに捨てた理由として、食べ残しが五十七パーセントで一番多く、次に、いたんでいたが二十三パーセントで二番目に多く、三番目に多かったのが期限切れでした。

この食品ロス問題を解決するためにはこの地球という星に住んでいる全ての人が動かなくてはいけません。だから「自分には関係ない」ではなく、少しでも買いすぎに注意したり、家にある食材に目を配るだけで食品ロスは減ると思います。少しのことから始めるだけで最後には大きな力となってこの星を動かすことができます。地球に住んでいる全ての人でこの大きな食品ロスという壁に立ち向かい、解決しませんか。

優秀作品

世界の中での「ＳＤＧｓ」

上林中学校３年　稲葉（いなば）　玄造（げんぞう）

「ＳＤＧｓ」について僕は色々と聞いたことがあります。それは「ＳＤＧｓ」について知っている人が日本国内ではまだ五十パーセントにも満たないそうで僕自身もつい二〜三年前までは、知りませんでした。

「ＳＤＧｓ」とは、二〇一五年九月に国連サミットで加盟国の全会一致で誕生した。とありました。

その中のいくつかある目標の中で僕が注目したのが「気候変動に具体的な対策を」というものです。そして「ＳＤＧｓ」開始から一年、日本の温室効果ガスの量が、二〇一六年度は、十三億四百万トン、そして二〇二〇年度は、十一億四千九百万トンと、なんとたったの五年程度で一億五千五百万トンもの削減に成功しています。しかし、「『ＳＤＧｓ』達成ランキング」というものを見てみると、二〇二二年現在のランキングでは、一位フィンランド、二位スウェーデン、三位デンマークと上位を欧米が占めていて、日本は十八位でした。この結果だけ見ると日本の順位が少し低いように思いますが、「ＳＤＧｓ」に取り組んでいる国は、なんと百六十三カ国にも及ぶそうです。このように総計的に見てみると日本がかなり上位なのがわかります。

この「ランキング」を見ていて疑問に思ったのが「なぜ上位の国を欧米の国が占めているのか」です。それを調べたところ、「欧米はＦＡＯ理事会で承認され、協力しあい『エコラベル』の貼られた商品を普及させている」とありました。「エコラベル」の貼られた商品の例として、タオルなどは「リサイクル繊維が一定の割合を占めていること、有機栽培綿の製品であること、リサイクルされるしくみが整っていること」などです。人工的に作られた物ではなく、自然界の物であったり、リサイクルされた物によって製造された物に付くラベルで、欧米諸国の人口の九割が「エコラベル」の付いた商品を買っているそうです。

そしてもう一つ気になることがあります。それは地球温暖化などの地球環境問題に対して「今、自分達にできることとはなにか」です。色々と簡単な事は思いつきますが「地産地消の商品の購入、消費」というものを見つけました。僕は「地産地消の商品の購入、消費」について「一体何の意味があるのだろうか」との疑問を持ちました。調べると「農産物を運ぶ距離が短くなることで、二酸化炭素や、エネルギーの削減につながり、それが環境への負担を軽減することにつながる」とあり「なぜ今までそれに気づかなかったのか」と逆に自分への疑問が生まれるほどでした。

このように問題は沢山ありますが、「自分自身がどうすればいいのか」を明確にして、それを国などの政府側に言うのではなく「自分が広めるんだ」という覚悟をする。そして、自分から率先してどれだけ多くの人に自分の「思い、考え」を伝える事ができるかどうかだ。

実は、僕の家での生活は、自然であること自体が自然になっています。ふろは、間伐材でわかし、水は全て井戸水です。考えてみるとこれこそが「ＳＤＧｓ」なのではないかと思います。この事に気づいて、「ＳＤＧｓ」の第一歩というのは案外身近にあるのだという事がわかりました。

これらを広げるためには二通りの方法があると思います。一つは、クチコミなどで人から人へ伝えていく方法です。広がりにくいですが、直接伝わるので心に響いて行動に移します。もう一つは、大企業や政府などが主導で広げる方法です。一気に広がりますが、気持ちが伝わりにくいのではないかと思います。そこで僕は、日本全国を旅しながら、各所で自分の熱意を伝え、「ＳＤＧｓ」を実現させます。これを実現させる事で世界の貧困状態にある人たちを幸せにできると思っています。

佳作
作品

地球温暖化の危機

西八田小学校６年　久田（きゅうた）　香菜子（かなこ）

私が地球温暖化に興味を持ったきっかけは、梅雨が十四日間という短さで、その後すぐに暑くなってきたからです。地球温暖化と梅雨にはどんな関係があるのかを調べてみました。

まず、どうして梅雨になって雨が降るのかについて調べました。雨が降る理由は、温暖化により空気中の水蒸気が増加し、梅雨前線の水蒸気も増加するからだそうです。地球温暖化が進むとともに、洪水や土砂災害が起こる確率が高くなるといえます。

次に、地球温暖化がどんどん深刻になっていく理由を調べました。地球温暖化は二酸化炭素が関係しています。この二酸化炭素が空気中に増加してしまい、地球温暖化が深刻になっているといえます。

そして、地球温暖化について私たちに今できることを考えてみました。一つ目は、植物を植えることです。植物は温暖化の原因である二酸化炭素を吸い、酸素を出してくれます。二つ目は、近いところは歩いたり、自転車で行ったりすることです。車が走るときに出る二酸化炭素を、歩いたり自転車にすることによって減らすことができます。その他に、エアコンなどをできるだけ使わないことや、地元の京都や綾部でとれた野菜を買うことなどによって、地球温暖化の対策になります。一人でなんとかしよう、ではなくて、みんながこの問題を考えることで、少しはおさまると思います。また、グリーンカーテンという方法もあります。グリーンカーテンは日光を葉でさえぎり、涼しく感じることができます。

地球温暖化は、地球をどんどん暑くしてしまい、雨も降らせてしまいます。そして、私たちが通っている西八田小学校では毎年夏休みに「省エネチャレンジ」に取り組んでいます。今年はいつもより、深く考えることができたので、これからも大切にしたいです。

私たちの住んでいる綾部にはたくさんの緑があります。これからも緑を大切にして、緑の力で地球を救いたいです。

佳作作品

ウクライナと広島

豊里中学校１年　村上（むらかみ）　結愛（ゆうあ）

今年の夏休みに家族で広島に行った。理由は小学校の国語の授業で「たずね人」を読み、原爆資料館や原爆ドームを実際に見てみたいと思ったからだ。原爆資料館では、八時十五分で止まった腕時計やご飯が炭になってしまった弁当箱、ぐにゃぐにゃに溶けてしまったガラスビンなどを見た。また、原爆が投下される前と後の街の様子の写真もあった。たくさんの人が行きかうにぎやかな街が一瞬のうちに消えてしまった事におそろしくなったし、現実に起きたという事に怖いと思った。また、原爆投下の当日、広島は天気が良く原爆の効果や条件がそろっていたから選ばれたそうだ。

その後ホテルでテレビのニュースを見ているとウクライナ侵攻の事をやっていた。黒くこげた建物や戦車、泣いている大人や子供が映っていた。原爆投下から七十七年が経ったのに資料館で見た物と似ていると思ったし、今でもこんな事をしているのかと悲しくなった。

今、日本では戦争はないけど、世界のあちこちで戦争やテロが起こっている。また、現在世界には一万発以上の核兵器があるそうだ。そして国と国で争い、武器を使って人を殺しあう。また、他の国が武器を送って助けている。ウクライナの戦争が始まった理由は分からないが話し合いで解決できなかったのかと思う。また今でもウクライナやとなりのポーランドはロシアやドイツによって占領されてきた事があった事を知り、今回のような悲しい出来事が繰り返されているのかとおどろいた。またニュースでロシアでは、自分の国は正しい、ウクライナは間違っていると国民に伝えているそうだ。そして、国が間違っていると言ったり、デモや運動をするとたい捕されてしまうそうだ。また、原爆投下の前、日本は真珠湾を攻撃し太平洋戦争が始まった。その時日本も自分の国は正しい、アメリカは間違っていると伝えていたそうだ。新聞やラジオでは、日本が負けているのに現実を伝えず、勝っていると伝えていたそうだ。この事も今のロシアと似ていると思う。また、国民も自由に考えたり動く事が出来ない時代で、新聞やラジオが伝える事を信じてしまうと思うし、とても怖くなった。

今、私たちは普通に生活し、学校に行ったり遊んだり出来る。それは当たり前の事だが、当たり前に出来なくなるのが戦争だと思った。原爆投下から七十七年たった今まで戦争が繰り返されてきた歴史を知り、どうしたら戦争をしなくてもよいのか自分なりに考えていきたいと思う。世界中の人が相手の事をよく考え協力し、仲良くなれば戦争はなくなると思う。また武力に頼る事なく、時間がかかっても話し合いで解決できたらいいと思う。私たちには、戦争がない日本にいるからこそ出来る事があると思うし、「外国の戦争だから」「ウクライナの人かわいそう」と思うだけではいけないと思う。私たち一人一人が今当たり前に生活している事に感謝しながら「もし日本が」「もし家族が」と自分の事として戦争や平和の事を考えていかなければならない。

佳作作品

平和について考えるきっかけを

上林中学校３年　井上（いのうえ）　歩乃花（ほのか）

「八月六日」「八月九日」この数字を見て頭にパッとある恐ろしい出来事を思い浮かべる人が多いだろう。私は毎年、この二日を特に何もなかったように過ごしてしまっている。しかし、今年の八月九日、テレビで長崎の原爆犠牲者慰霊平和祈念式典のニュースが流れた時、幸せな日常を一瞬で奪う核爆弾への恐怖を覚えた一つの出来事を思い出した。

「ふりそでの少女像」を知っているだろうか。七十七年前、長崎で被爆した二人の少女の像だ。私は二年前、学校の授業で、この二人の少女の実話が描かれている「ふりそでの少女」という絵本を初めて読んだ。同じく被爆した作者が、火葬される二人の少女の姿が忘れられず、その光景を一枚の絵にし、二人の少女について知っていくという戦争の恐ろしい情景が細かく描かれた絵本である。この絵本の一番最後に、「あなたたちの死を無駄にしないよう、私たちは平和を訴え続けます。」と書かれている。この絵本を読み終わった時、今まで戦争は昔のことで他人事のように考えた自分が嫌になった。それと同時に、体がふるえるぐらい戦争への憎しみを感じたことを二年経った今でも覚えている。

私が住む綾部市は、ふりそでの少女の一人のお母さんが住んでいた。そのお母さんは、綾部の中学生に像を造りたいと相談した。私と同じ中学生、しかも同じ地元の中学生が協力し、ふりそでの少女像を造るための街頭募金を行っていた。その事実を知り、戦争を経験していなくても平和を願い、「戦争」という恐ろしい過去を残すべく行動した中学生に私は尊敬せざるを得ない気持ちになった。

私は、二年越しに「ふりそでの少女」の絵本を読んだ。二年前と同様、戦争は憎むべきものであり、二度と起こってはいけないと思ったのと同時に私が「ふりそでの少女」を通して、戦争の恐怖を知り、平和を願う気持ちが芽生えたように、自分ももっと戦争の本質をさぐり学び、誰かの、戦争について考えるきっかけを作りたいと思った。

戦争を経験した人が減ってきている今、「戦争＝昔のこと」と捉えている人が多いのではないか。しかし、現在ロシアのウクライナ侵攻という平和とは真逆な恐ろしい出来事が起きている。戦争の時代を生きていない私達からすると、とても衝撃的な光景をニュースで目の当たりにしている。私は、決して戦争は現代と程遠くはないと思う。起こるべきでない戦争がいつ起きてもおかしくないと私は実感している。戦争を起こさないためには、戦争を知らないからこそ、関心を持ち、知ろうとすることが必要だ。また、被爆され、亡くなられた方の命が無駄にならないよう、今を生きる私達は次世代へ語り継ぐ義務があると思う。全ての人が手を取り合い、心から平和を願う世の中になってほしい。そこで私は、一つの疑問が頭に浮かんだ。「そもそも平和とは…。戦争がない世界は平和なのか。核兵器が存在しない世界は平和なのか。」私はそうではないと思った。周りで心ない言葉をかけてる人を見かけたことはないだろうか。差別やいじめをしている人がいないだろうか。戦争よりも身近なことのように感じると思うが、これらのことで命を自ら絶つ人も残念ながらいる。戦争をしていなくても核兵器を使っていなくても、人を傷付け追い詰め命を奪うのならば、それは現代の戦争の形になってしまっているのだと、

私は考える。

　せっかくこの世界で生きているのなら、悲しみや苦しみ、おろかさを感じて生きるより、人々の温もりがそばにある方がいい。戦争を起こすのは人。平和をつくるのも人。だから私は、戦争で命を落とした人の分も伝えたい。誰かの、戦争について考えるきっかけを作りたい。何年経っても、「八月六日」「八月九日」この数字を見ると頭にパッとあの恐ろしい出来事を思い浮かべる人が続くために。

佳作作品

在日外国人が差別被害をなくすためには

上林中学校３年　渡邉（わたなべ）　悠人（ゆうと）

現在、日本に住んでいる在日外国人は、約二百八十八万六千人いる。そんな在日外国人に、日本に住んでいて困っていることについて聞いたアンケートで一番多かったのは、「言葉が通じない」ことだった。その他にも、外国人と言うことで差別や偏見を受けて困っている人もいる。

日本に働きに来ている外国人にとって、言語の壁はとても大きな問題だ。観光に来ているだけなら、日本語がわからなくても翻訳されていたり、お店の人に聞いたりして、不自由なく観光ができる。しかし、働きにきている人にとって、日常で使う日本語がわかってもその地域特有の方言や、専門用語、敬語など様々な使い方をする日本語を完璧に習得するのはとても難しいことだ。そもそも、仕事内容を把握できていない状態なのに、何を言っているかわからなければ、他の日本人よりはるかに仕事が遅れてしまう。日本に来てお金を稼ぎに来ている人は、家庭が貧しいなどの問題を抱えて来ている外国人には、とても過酷なことだろう。また、母国語が通じない中で生活することもストレスがかかるのではないだろうか。

僕は、夏休みに入る前、人権について学ぶ人権学習をした。今回の内容はヘイトスピーチだった。ヘイトスピーチとは、特定の人種や、ある国の出身者であることを理由に、脅迫したり、脅したりすることだ。その学習では、実際にヘイトスピーチにあった人の話を動画で見たり、自分はどのように考えるのかについて発表したりした。僕は、ヘイトスピーチのような体験や、外国人と話すという経験をしていないので、あまり具体的に想像できなかった。しかし、友達の意見を聞いてみると「知らない国に一人で来て働いているだけなのに、その人を苦しめる行為をするのは、おかしいと思う。さらに、日本を苦しめるという目的で来ているわけではなく、日本に来なくてはいけない事情があるかもしれないのに、その人の気持ちを考えられないのは、最低だと思う。」と言っていた。確かに、表現の自由が許されている日本では、様々な方法で表現できる。だが、特定の人を苦しめるような表現のしかたはおかしいと思う。

僕の住んでいる地域はとても田舎なので、近所の人をはじめ、地域の人は全員僕たちのことを知っていて、僕たちも、地域の方を知っているような関係だ。でも、今年に入ってから、近所を外国の方が歩いて建材会社に向かって行く姿を時々見るようになった。僕たちの地域に外国人がいることがなかったので最初は驚いて地域の人に必ず挨拶をするようにしていたが、無視されるのではないかという怖さがあり、声をかけられなかった。しかし、人権学習で習ったように、人を見た目で判断するのは良くないと思い、挨拶をしてみた。すると、はじめは無視をされた。この時火がついた。何としてでも外国の方と挨拶という形でもふれ合いたいと思い、諦めずに挨拶を続けた。続けるにつれ、会釈をしてくれるようになった。次は、手でグットのポーズをしてくれた。最終的には、カタコトだったけど「オツカレサマデス」と言ってくれるようになった。僕はこのとき、諦めずに続けてよかったと達成感を感じたし、感動を覚えた。

差別をなくすためには、ＳＤＧｓの活動はもちろん差別を許さないという思いも大事だ。でも、僕が経験したように、身近な人からの意見を聞いたり諦めず挨拶をしたりといった行動が差別をなくす一歩だと思う。僕が今回経験したことは、ほんの一歩に過ぎないが、在日外国人が思う本音を聞き、正しい情報を知り、知らない人に伝えることが大切だと思う。こうした思いが、日本中に広がり、最終的には世界中のみんなの心に響いて、差別のない誰もが安全安心に暮らせる世界になってほしい。これが僕の願いだ。